

日銀の視点

1月終わりの弘道館付近にて、オミクロン株の急拡大が心に重くのしかかり、気候的にも寒さが身に染みる状況であったが、ごくわずかながら梅の花が咲き始めているのを見つけ、心に温かさや希望を感じた。写真にも収めようとしたが、素人には難しい。自動ではピントが合わず、カメラの説明書を引っ張り出し、マニュアルで撮影した。ささやかな達成感も加わり、水戸の梅に明日への活力を頂いた。

日銀水戸事務所長 上野 淳

為替の影響をみる視点

さて今回は、為替変動が実体経済に与える主なルートを整理したい。円安方向への変動を想定すると、まず、①輸入コストが上昇し、それに伴い企業収益や家計の購買力が下押しされるルートがある。

となっている。

次に、②輸出企業の価格競争力上昇を通じたモノの輸出数量の増加や③円ベースでの輸出額の増加を通じた企業収益の増加とのルートがある。単純化すると、例えば為替相

だ。このルートの効果は、主要な輸出企業が2010年代半ばまでに生産拠点の海外移管を進めたことなどから、以前に比べると低下しているとみられる。

また、④海外からの所得(ネット受取額)の

円換算額が増加するとのルートもある。例えば、

ちなみに、企業間取引におけるモノの輸入価格を調査する輸入物価指数(1月速報)は1年前から4割弱上昇しているが、このうち約3割が世界的な資源価格上昇などによる「契約通貨ベース」での上昇であり、円安の影響は約1割

場が1割100円から120円に円安化した場合、1個1ドルで輸出しているモノの円ベースでの売上高が100円から120円に増加するとか、ドルベースの価格を引き下げることが可能となって輸出数量が増えるといったルート

海外に事業展開する企業が海外事業から獲得する収益や、海外での投資に対する配当などが、ドルベースでは変わらなくても、円安化により円ベースでは増加する、といったルートだ。このルートの効果は、近年強まっているとみら

れる。さらに、コロナ禍で今後は難しいが、⑤訪日外国人による国内消費の増加とのルートもある。

2点ほど留意点を付け加えたい。まず、為替相場は円安・円高のどちらに動くにせよ、経済や金融の基礎的な諸条件を反映して安定的に動くことが極めて重要である。2点目に、為替変動の影響は、輸出関連企業か内需型企業かなど、事業内容・規模などによってまちまちと考えられる。為替変動の経済への影響は、これらさまざまな視点を踏まえつつ、多面的にみる必要がある。

(今回は3月12日掲載)